

# 聖マリア国際協力ニュース

第99号

平成20年11月1日発行

## インドネシア スタディ・ツアーに参加して

ICU・CCU 堤礼

※10月20日～26日の日程で、開発途上国における生活や医療の現場を見る機会を通して異文化への理解を深めること、また問題解決型思考を促進することを目的に、第1回インドネシア国スタディツアーを実施しました。以下にツアーに参加された堤礼さんの感想を掲載します。

よくテレビ等で耳にする“発展途上国”という言葉。幼い頃から、この言葉を聞く度に、いったいそこにはどんな人々が住み、どんな文化があるのか不思議に思い、いつか行ってみたいと興味を持つようになっていました。今回、その思いを果たすべくこの研修に参加しました。普通の旅行では見られないような国のしきたりや、様々な制度、もちろん病院の内部など知ることができ様々なことを考えさせられた良い機会になりました。

私達は、タムリングループのタムリン病院、チェランシー病院、保健所支所のブスケスマス・クマヨランの見学に行きました。いずれも想像以上に設備は整っており、薬剤なども日本よりも少ないですがある程度は揃っていた印象をもちました。日本よりもはるかに低い医療レベル

ではありますが、スタッフ一人一人のモチベーションが高く、新しい技術など取り入れようと努力をする姿は印象強く心に残っています。その反面、感染予防対策として、私達が普段何気なしに使っている手袋やマスク、帽子。これらも全て患者負担の資材となっていました。つまり、お金が裕福な人でなければ充実した医療は受けられない。同じ人間であるのに命の価値がお金で左右されてしまう、非常に悲しい現実を目の当たりにしました。

今回のツアーは自分の物事の考え方など見直す良い機会ともなり、参加できたことに感謝しています。



ブスケスマスの玄関にて

## JICA 研修員と聖マリア学院学生との交流会

※去る10月28日にJICA研修員と聖マリア学院大学の学生との交流会を開催しました。このような研修員と病院職員および学生との交流会は3年前から実施していますが、日本人にとっては異文化に接することができる貴重な機会であると同時に、研修員にとっても多くの日本人と知り合う機会となり、どちらからも好評を得ています。今回の交流会に参加した学生たちより感想が寄せられていますので、その一部を以下にご紹介します。

「交流会では様々な国の人々と話すことができ、また多くの文化に触れることができ、とても貴重な経験になって良かったと思います。普段の生活の中で、どのように異文化と接することはほとんどないと思います。JICA研修員の方々も話しやすい方々ばかりで、お互いの拙い英語やカタコトの日本語でもコミュニケーション

をとることができました。このような機会を設けていただけて本当に良かったと思いました。ありがとうございます。」(地域看護学専攻 1さん)

「私はJICAに興味があるので、今回の交流会はすごく良かったです。いろいろな国の方々と話すことができ、勉強になりました。韓国実習でも自覚したのですが、英語が話せたらもう少しスムーズにコミュニケーションができ、聞きたいことも聞けるのと思います。少しずつ英語が話せるように勉強していこうと思います。また国の文化によって食べられない食材があり、そのことに配慮しながらおもてなしをすることの難しさも今回経験しました。様々な国の文化についても、もっと知りたいと思いました。今回このような機会を与えてくださってありがとうございました。研修員の方とメールでやり取りをしながら、もっと交流を深めたいと思います。」(地域看護学専攻 Yさん)

「私はフィリピンとニュージーランドに行ったことがあり、現地の人々と話をすることがあったが、今回初めてスリランカやウガンダ、中国の方々とお話することができた。英語が不得意なため、意思を伝えることに時間がかかったが、彼らは熱心に耳を傾けてくれたのが嬉しかった。たとえ日本語でも、目と目を合わせる、相槌を打つなどしてコミュニケーションがとれたので、心をこめて言ったことは伝わるのだと実感した。海外に行って歴史や文化を体験することも大切だが、日本に居る外国人との交流でも、その国のことを知る第一歩になると思う。私はこれから20カ国の人々との交流を目標に、積極的に活動していきたいと思っている。とても貴重で楽しい時間を過ごすことができました。ありがとうございます。」(看護学部 Nさん)

## 国際結核シンポジウム " More focus on Laboratory: what can the laboratory do for Stop TB strategy/DOTS?" に参加して

国際協力部 山崎裕章

国際結核シンポジウムは、10月19日(日)に第39回国際結核・肺疾患学会(パリ)の会場にて国際協力事業団(JICA)と結核予防会(JATA)の共催により開催されました。

このシンポジウムへの参加は、現在従事しているインドネシア結核対策プロジェクトのカウンターパート(C/P)が報告を行うことから、その支援を行う事が目的でした。シンポジウムでの他の報告者は、JATAがJICAから受託・受注、または支援を行っている結核対策プロジェクト(カンボジア、ミャンマー、パキスタン、アフガニスタン)で結核菌検査に従事しているC/Pでした。報告内容は多岐で、人材育成、外部精度保証(EQA)、地方病院での結核菌培養、不安定な社会下での結核菌検査活動でした。インドネシアからは結核菌検査の現状と新プロジェクト活動紹介が行われました。シンポジウムへの出席者は100名くらいで、WHO結核対策官、JICA集団コース(結核対策、検査)の修了者、結核対策を行っているNGO、JICA/JATA結核対策プロジェクト専門家でした。いろいろな意見交換が行われ、学ぶことが多く、

大変有意義なシンポジウムでした。

学会では、パキスタン結核対策プロジェクトの元C/Pがポスター発表を行いました。私はこの発表の共同発表者になっていたことから、この発表に関する質問にも対応しました。また発表会場では、マラウイのプロジェクトのC/P2名に、そして3月に調査で訪問したケニアとエチオピアの結核対策の方々にも会うことができました。パリでのポスターセッションの様子 いったときアフリカに戻った気分でした。



パリでのポスターセッションの様子

## 熊本研修旅行で感じたこと

※JICA研修員の一人であるヘンリーさん(ウガンダ出身)が熊本と長崎への研修旅行についての手記を寄せてくれました。今回は熊本研修についての感想を掲載しますが、旅行で訪れた白川水源および阿蘇山について感じたところが述べられています。(長崎旅行については、次号に掲載します。)

熊本と長崎への研修旅行は、単に楽しい旅行であったというのみならず、日本文化や日本人の環境に対する心配り、そして人を許そうとする心の豊かさや深さに触れ、啓発される機会となった。

緑の丘や山々の美しさはまさに芸術の産物というべきものであった。しかしこれらの山々は我々の旅を阻むことはなかった。というのも、山々の中腹は日本の工学的英知の賜物であるトンネルによって次々に貫かれていたからである。

熊本は息を呑むほど素晴らしい場所だった。泉の水はまさに「命の泉」というべきものであった。水は綺麗で飲料に適したものだ。水を入れる容器を持参するように言われていたが、私が持ってきた容器は小さくて十分な量を入れることはできなかった。持ち帰った水はわずか数日で飲み干してしまった。「ああ!もう一度あの場所に戻れたらなあ」と思えばかりだ。



白川水源を訪れた研修員たち

火山を登る途中で、深い谷間を目の当たりにした時はドキドキするような怖さを覚えた。怖くはあったが、それでも安心していられたのは、パ

スの運転手の素晴らしい技量のおかげであることに感謝したい。山頂へは(ガス発生のため)登れなかったものの、外輪山を見ることができたことで十分に満足であった。ヨーロッパ大観峰にて(後列中央の男性がヘンリーさん)建築と日本建築の両方の特徴を巧みに取り入れた家々は言葉で言い表せないほど素晴らしい。これだけでも一見の価値があると思う。



大観峰にて(後列中央の男性がヘンリーさん)

## 今月の動き



【研修受入】  
・11月15日(土)  
JICA 集団研修「病院経営・財務管理」コースの研修員11名、および韓国カトリック医療協会より1名(オブザーバー参加)が研修を終了し帰国。

【派遣】  
・10月15日(水)～11月23日(日)  
山崎裕章(国際協力部)が結核対策プロジェクト参加のため、インドネシア国へ出張。

【その他】  
・11月16日(日)～11月21日(金)  
ラオス国スタディーツアー実施。参加者は古賀さとみ(看護師)、伊藤徹哉(理学療法士)、堤善充(臨床工学技師)の3名。